

写真: リベラルタのマドレ・デ・ディオス川とベニ川の合流地点の眺望と渡し舟(Ponton)

講師

大鳥 正裕 氐

立教大学ラテンアメリカ研究所研究員 第五回JICA海外移住「エッセイ・評論」部門最優秀賞受賞者

Zoom Webinar 事前登録制 定員500名



講師略歴

2006年、青山学院大学大学院博士課程文学研究科史学専攻標準年限 期限修了。2001~2004年、在グアテマラ日本国大使館専門調査 員。2006年から一般財団法人日本国際協力システムに勤務。2014 ~2017年、在ボリビア日本国大使館一等書記官(開発協力班)。 明治大学島嶼文化研究所客員研究員及び青山学院大学非常勤講師。 専攻は、ラテンアメリカ近現代史、日本人移民史。編著書に『ボリ ビアを知るための65章』(明石書店、2025年)。論文に「1910~ 20年代前半のボリビア・リベラルタにおける日本人協会の機能と課 題 - 「リベラルタ日本人協会議事録」の分析を中心にして」、『立 教大学ラテンアメリカ研究所報』第53号。「ボリビア・リベラルタ とともに生きた日本人 - 下瀬甚吉 - 」で第五回JICA海外移住「エッ セイ・評論 | 部門最優秀賞受賞。

講演内容

20世紀初頭のボリビア・アマゾンには、ペルーから移動してきた多くの日本人が、ゴム産業で一攫千金をあ てようと移住してきた。特にベニ県のリベラルタには多くの日本人が集まり、1918年には700名もの日本人が 住んでいたとされる。当時リベラルタは、ゴム産業の中心地として栄え、日本人はゴム採取人、市内の小売 店、あるいは郊外の農作業に従事し、町の中でもプレゼンスが高かった。

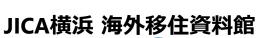
この中に山口県出身の下瀬甚吉という人物がいた。慎み深く謙虚な甚吉は、ゴム景気が傾き、多くの日本人 が町から流出した後もリベラルタに残り、地元社会と折り合いながら、忍耐強く日本人のプレゼンスを高めて いくのに努力した。厳しい時代も生き抜いたリベラルタの下瀬甚吉-ボリビアの有名な詩人ペドロ・シモセの 父-に焦点を当て、地元社会に溶け込もうとしたある日本人の横顔を紹介する。



▲受賞作品は こちらから

2025年11月19日② 19:00~20:30







045-663-3257 jomm02@jadesas.or.jp

参加登録用URL https://us06web.zoom.us/webinar/register/WN_6k_LHXiHRu-WwwrW8A8faQ



MBRAZIL